

# 八幡平

-1614m-

岩手県松尾村

JR東北本線盛岡駅から岩手県北バス八幡平・藤七温泉行き八幡平頂上下車

JR田沢湖線田沢湖駅から羽後交通バス八幡平行き終点下車

1999年10月15～16日

23:50 新潟港発

(新日本海フェリー 新潟 秋田 ¥2820)

翌日6:00 秋田港着

6:30 秋田港発～朝食

(フェリー連絡バス 秋田港 JR秋田駅 ¥390)

8:00 秋田新幹線乗車

(ウィークエンドフリーきっぷ ¥16000)

9:00 JR田沢湖着

(羽後交通バス 田沢湖駅 八幡平頂上 ¥1990)

11:30 八幡平頂上着～散策

15:00 八幡平頂上発

(岩手県北バス 秋田八幡平 JR盛岡駅 ¥1320)

17:00 JR盛岡発

18:00 JR水沢着

今回八幡平に行こうと思った理由は、JRのパンフレット 1 に紹介されていた事、花巻空港にあった観光案内板を見た事、その二年前の五月の連休に家族で行った(山頂の駐車場までであるが)事があり、少しではあるが地理も知っている事などである。そして偶然会社の昼休みに食堂で無料配布された新潟の情報雑誌を何気なく見ていたら新潟 秋田の航路があることを初めて知りこれに乗船することも兼ねて八幡平行きに決定した。時刻表を見ながら山行き計画を立案する。新潟 秋田航路は夜間の運行なので船中泊となる。秋田に早朝に着くので時間的に効率がよい。秋田から新幹線こまちで田沢湖まで行きそこから八幡平行きのバスに乗換することになるが乗換時間が5分位しかなくやや心配。しかし以前訪れたとき駅前にバスセンターがあったことを記憶しており何とか間に合うだろうと思った。季節は秋から冬に向かっておりこの時期の八幡平は寒そうであ

る。いい紅葉が見ればいいのだが。

出発日の夜、万代バスセンター行き最終バスに乗ろうとして近くのバス停に向かって走った。始発バス停の一つ手前のバス停なので定刻にバスが来るはずであり走ってぎりぎり間に合うと思っていた(いつもは間に合うのに)。がバスは既に通過したらしい。定刻を10分過ぎててもバスは来なかった。仕方無くJR白新線の犬形駅から最終の新潟行き電車に乗る。新潟駅からフェリー乗り場まで走り乗船時間に間に合った。

23:00 新潟駅

23:08 万国橋

23:12 中央埠頭

23:15 末広橋

23:20 フェリー乗り場

23:30 乗船

待合室には誰もいなかった。乗船客は私一人だけだった。他は全てドライバーか団体客だったようだ。係の人が私一人のために乗船口のエスカレーターを動かし、船への渡り通路も設置してくれた。

乗船後、カウンターで二等寝台ベッドの指定を受け荷物を置いてから売店に行きいろいろと物色す



写真1 ハイキングコースから山頂駐車場を望む

る。結局チョコレートを2個買った。ベッド室には二段ベットが6つある(計12人)が小生のベッド室は小生のみ利用だったので独占状態であった。船内は広く、多くの設備があってしばらくあちこち歩き回った。最後にデッキに出た。新潟港を離れるまでそこで夜景を眺めた。改めて港町新潟を実感する。

翌日5時頃起き窓の外を見ると広大な貯木場が見えた。秋田名産の秋田杉と思われた。着替えてデッキに出る。肌寒いが小生は乗り物に乗って景色を眺めるのが好きなので苦にならない。船はしだいに減速し港が近い事を知る。多くの団体客といっしょに下船する。秋田港ターミナルビルはまだ新しく明るい感じがした。船内に秋田港からJR秋田まで連絡バスがあると掲示されていたのでそれに乗車することにした。バス停はビルの前にあった。当初は秋田新幹線こまちの乗車時間に余裕があるので近くの土崎駅まで歩くつもりだった。

秋田駅は新幹線開業で一新したらしく一見すると駅とは思えない建築である。コンコースは板張りだったと記憶している。秋田杉であろう。駅内のコンビニでパンとお握りを調達する。こまちの自由席はほぼ満席だった。こまちに乗車するのは今回が初めてである。新幹線なので在来線と併用とは言えかなりスピードUPしてるのではないかと期待したが、体感的にはのろのろ運転。新幹線が通る以前の特急たざわには何回か乗った事があるが、同等のレベル(速度・乗り心地)と思った。それと、大曲駅ではスイッチバックなので進行方向が逆になる。すなわち秋田 - 大曲間は進行方向と逆向きに座る事になる。この点も在来特急と変わらない。

田沢湖駅で下車。この駅も改装された。駅内に各種の展示物や観光案内が掲げられているが今回はじっくり眺める余裕がない。駅を飛び出し目の前にあるバスセンターに走る。待合室に入ると反対側の入口にバスが待機していたのでそれに飛び乗る。乗客は4~5人で閑散としている。これならゆっくりとバス旅ができると思った。このバスは沿線の観光案内のテープを流しながら走るの観光バスに乗車している気分になる。田沢湖の湖面が見える。バスは湖畔のバス停に向かう。駐車場に長い行列をつくって立っている人々が見えた。どこかの山岳会の

団体だろうか。バスは大きくターンをし停留所に停車する。すると行列の人々が続々とバスに乗り込んできた。一気に車内は満席となる。有名観光地なので当然なのかも知れないがびっくりしてしまった。この辺りはまだ紅葉の気配もない。バスはその後1時間近く走った後、ダム湖脇の駐車場でトイレ休憩のため停車する。山間の道路にも飽きてきた頃、色とりどりに紅葉した木々が谷筋に見えてくるようになり車内ではその度に歓声が上がった。そうこうしているうちに全山紅葉地帯に入り玉川温泉付近は圧巻であった。ちょうど日が差してきて赤と黄の色が鮮やかだった。この景色に囲まれ温泉に浸かるのは最高であろう。

玉川温泉で半分くらいの乗客が入れ替わる。そのあとは各温泉でばらばらと乗降客があるが空席がしだいに増えてきた。標高が高くなるにつれ紅葉している木が少なくなり反対に八幡平のシンボルであるアオモリトドマツが増えてきてこの地方独特の雰囲気となる。

終点の山頂バス停で下車。案内板でコースを確認する。駐車場から道路を挟んで向かい側の斜面がハイキングコースの上り口となっている。最初は林間のコースで展望はない。途中で道が左右に分かれるが左の八幡平山頂を目指す事にした。しばらく進むと右手の樹林の中に2つの小さな沼が現れる。山頂の風景に期待しながら歩いていくと平坦な台地の真ん中に木で組んだ檣(展望台)が立っていた。檣の側面に八幡平山頂と記されていたのでここが山頂らしい。しかし周囲が低木に囲まれ展望はほとんど無い。檣の上には団体客が居座っていて賑やかである。このため山頂に立った余韻に浸る気も失せたので早々に退散し八幡沼に向かった。こちらの方は



写真2 八幡沼

ずっと人も少なくなりやっと静かな山歩きとなる。左前方に眺望が開け樹海と草地が見えてきた。

八幡沼の展望台に立つ。八幡沼を眼下に一望できる。また、その周辺の湿原やアオモリトドマツの樹海が高原の雰囲気を一層きわだたせている。ここから見える風景は観光案内のパンフレットに必ず載っているのが初めて来た割には感動が少なかった。かなり冷え込んできたので軍手をしても手がかじかんでしまう。じっとしていると寒さが堪えるのですぐに歩き始める。山小屋( 陵雲荘 )の脇を通り広々とした湿原の木道を歩く。湿原の草は既に枯れていて一面薄茶色である。所々に冬山スキーの識別表と思われるポールが立っている。

時間的に余裕があったので源太森に登る事にした。湿原を離れると木道がなくなり道は樹海の中の石ころが点在する一般的な登山道となる。源太森へは八幡沼 - 黒谷地湿原のメインルートから左手に分岐する細い道に入る。灌木を払いのけながら登っていくと頂上に出る。この場所は北面の安比側の展望が良い。じっくりと風景を楽しむことができた。と



写真3 岩手山

きどき薄日が差し下界の紅葉が美しく見えた。

長居したので体の芯まで冷えてしまった。体を暖めるために黒谷地湿原まで行く事にした。途中、安比コースの分岐点があった他は特筆するものはなくほとんど林間を通る展望が無いコースだった。黒谷地湿原に着く。当然ながら既にシーズンは終わっていて枯れ草が一面を覆っているのみ。せっかくここまで来たのに少々残念。ここからは黒谷地バス停が近いのだが、何も無いところで寒さに震えながらバスを待つよりは八幡沼まで引き返すことにした。

寒さも頂点に達し歯がガタガタ鳴るが登り坂で一汗かき何とかもちこたえた。八幡沼の一周コースに入る。帰りは近道をし八幡平山頂には向かわず八幡沼の南側の木道を歩く。湿原から林間を抜け出ると正面に岩手山の雄姿が見える。眼下にはアスピーテライン( 車道 ), その先に山頂駐車場が見える。そのまま進むと最初に登った道と合流し山頂駐車場前に至る。

観光客で賑わう駐車場周辺を歩いていると「これは樹氷じゃないか。」という声が耳に入った。見ると周辺の針葉樹の葉には氷がこびりついている。どうりで寒いわけだ。寒さしのぎのため秋田側の駐車場の管理棟の中で写真展を眺める。バスの時刻になったので外に出るとばらばらとひょうが降ってきた。

バスで盛岡へ。時間があれば八幡平の温泉に入りたいのを我慢し自宅に向かう。< 完 >

#### 参考文献

1 : 列車で行く北東北トレッキング 1999夏 (JR東日本盛岡支社発行)